

波々伯部神社での聞き取り調査

京都府立大学文学部歴史学科 2 回生
上中 理帆

はじめに

平成 26 年 (2014) 9 月 3 日午後 2 時頃、波々伯部神社の社務所において宮司である近松健一氏に波々伯部神社についての話をうかがった (写真 1)。近松氏は、波々伯部神社に関する資料と事前に質問させていただいた事柄の回答を記した紙をもとに、地域に伝わる波々伯部神社の伝承などを話された。1 から 5 はその内容をまとめたものである。

また、今回の研修の事前調査として平成 26 年 8 月 3 日に波々伯部神社の本祭を見学し、祭事に参加している氏子の方々にも聞き取りを行った。6 で補足としてその内容を記載しておく。

1 波々伯部神社について

はじめに配布された波々伯部神社に関する資料は平成 4 年に書かれたもので、高校教諭をしていた歴史に詳しい氏子総代 (当時) の福井氏が記したものだという。以下が、この記事をもとに伝承として伝わっている波々伯部神社の歴史について近松氏に語っていただいた内容である。

波々伯部神社は、もとは京都八坂神社の御料寺であったため八坂神社の分霊を祀っている。そのため祭神は祇園牛頭天王であり、またその妃神である婆利采女と御子神の八王子も祀っている。明治新政府の政策により祭神は一度和名に改名され、猛速素戔男尊、奇稲田媛命、八柱御子神とされた。明治の中頃まで、御神座はなく薬師堂が建っていたが現在は無い。もともと祀っていた薬師如来を神仏

習合思想に基づいて祇園牛頭天王と同一と見なし、祭神としたという経緯がある。

正確な場所は定かではないが境内にかかっていたと思われる「祇園寺」と書かれた焼け焦げた札が残っており、現在は近松氏が薬師三尊懸仏とともに管理されている。また近松氏が幼少の頃は、神輿庫の 2 階に黒焦げの石仏が安置されていたということだが、何年か前の社役人が取り去ってしまい現在は無いという。これらから、戦国時代に祇園寺は戦火に遭っていると考えられている。また、もともと波々伯部氏の菩提を弔う寺であるものの戦乱の備えと思われる跡が社務所にあり、石長押という石礫を収めておく場所が残っている。さらに改修工事の際には、天井に隠し部屋が見つかった。倉庫としての役割があったようだ。

明和年間 (1764 ~ 1772) に祇園寺の住職が建立した本堂と庫裡が、現在社務所としてそのまま使用されている (写真 2)。かつて使用された上座の間は篠山藩主のために用意されたものであるが、現在は物置のようにしている。社務所はもともと「祇園精舎」とよばれ、牛頭天王の御廟もあった。境内には鐘もあったが、戦時中の金属供出のため現在は残っていないという。

かつて、神社は「祇園寺」とよばれ境内は「けやきの森」とよばれるほどけやきが多かったという。薬師堂や祇園社や蘇民将来舞堂 (もとの拝殿) や社坊が建っており、多くの人が参詣した。波々伯部氏の末裔に伝わっていた故波々伯部甲子太郎氏家蔵記録によると、波々伯部神社の始まりは、天平 5 年 (733) に吉備真備が播磨国より祇園牛頭天王御神霊を奉戴し帰京する途中、当地満楽寺薬師堂に



写真1 波々伯部神社



写真2 波々伯部神社社務所

宿泊した際に夢のお告げがあったため、神殿を造営し御分霊を祀ったことであるという。その後、本地を薬師如来としその化身として祇園牛頭天王が祀られ、波々伯部の地に住む一族の氏神となったとされている。

さらに波々伯部神社の古記録によると、承徳2年(1097)堀河天皇即位の際、京都の八坂神社の御霊社として波々伯部の地が寄進されたとある。そのため当時の波々伯部八カ村の人々は、領民として京都の祭りに動員されたり伏見に酒造りに行かされたりしていたようだ。このように京都の祭に参加していたことが、現在のような波々伯部神社の本祭が生まれるきっかけになったのではないかと、近松氏は推察している。

戦国時代には戦火に見舞われたが、豊臣秀勝の命令で復興再建され、また現在の本祭に伝わるキュウリヤマ、デコノボウ、オドリコはこの頃に成立したといわれている。明治に入ると、神仏分離令により社名を八坂神社に改められた。明治中頃、波々伯部一族の末裔が波々伯部氏の復興を願って波々伯部神社と改名したという。

2 氏子について

波々伯部神社の氏子には、農民であったにもかかわらず昔から姓があることが古文書の記載から分かる。よく見られる姓は、波々伯部氏の末裔とされる「波部」や宮ノ前地区に多い「向井」「荒木」などである。馬を飼う施設を所持し栗の栽培を古くから行う村人や、絹織物の原料を出荷する商人もいたらし

い。また、八カ村の氏子の多くは血縁関係にあり、遠い親戚関係である場合が多いのだという。

氏子といわれるようになったのは明治に入って祇園寺が八坂神社に改名されてからで、それ以前は八カ村の人々は檀家であった。ただし、「宮年寄」と「社役人」は檀家の頃から名称が変わらずに存在していたという。宮年寄は、波々伯部神社が祇園寺だった時代に、住職に代わって神事に関わるために村人から選ばれたことが初めと考えられている。

宮年寄は世襲制で、かつては12名存在し1人1カ月を担当していたが、現在は11名しかおらず、年次当番制度により2人で1年を担当している。社務所にはそのための引き継ぎの箱がある。社役人は技術と経済力を持つ村人が就任し、主に祭礼において技能労役で奉仕している。

八カ村は互いに意識し協力して昔から祭りを行ってきたという。それぞれの村の総代は、波々伯部神社の維持に大いに貢献しており、また貢献できる人物を各村が選んでいる。

3 波々伯部神社の祭礼について

毎年8月第1日曜日に行われる波々伯部神社の本祭のように山車が御旅所の大歳神社を目指し、順に田の道を進む渡御の様子は大変珍しいものとされている。ちなみに、その御旅所に祀られているのは稲田媛であり、素戔鳴尊のもう1人の妃とされている。渡御に際して演奏する祇園囃は神々に対する讚美歌のようなものととらえる人もいて、近松氏



写真3 護摩堂

もそう説明されているが、正確なことは不明である。この御旅所に関することは、社務所のケヤキの板に漢文で記されている。これは何代か前の住職が書いた文章を明治の彫師がケヤキの板に彫ったものと思われ、波々伯部神社のいわれなどを記した重要なものである。

本祭のオドリコは田楽が原型であるが、役に当たる小さな子供は舞を舞えないため、装束を着て太鼓を打つのみとなっている。またデコノボウの曲目は、仏教説話が8曲と狂言系が8曲である。

かつてミヤノトウが神社の神事に関する会議を行い、氏子がサラリーマン化している現状に対応するため、宵宮と本祭の日にちを8月4日5日から第一土曜日日曜日に変更した。また氏子の要請で、明治21年(1888)から境内に無数の灯明を灯して祖霊を招き、宮司が祝詞で供養する万燈会も行われている。現在は護摩堂における護摩の行は行わず、小規模な祭りとなっている(写真3)。

4 文化財について

聞き取りをする前に説明を受けた、社務所の欄間彫刻の龍は両面彫りになっており、見る側によって龍の表情が異なる。また、龍の髭も特殊な彫り方をしているということだ。この彫刻を天井に吊り下げられるためにかつては竹が使われていたが、補修の際に強度がある



写真4 社務所内にある欄間彫刻の龍

鉄に変えた(写真4)。

神社に伝わる文化財の薬師三尊懸仏はもともと八上城にあったが落城の際に寺役人により城外に運び出され隠されていたもので、波々伯部氏によって奉納された。篠山市歴史美術館に管理をお願いしていたが返還され、現在は社務所内のガラスケースに保管されている。

5 時代の流れによる変化

最後に近松氏が感じる、時代の流れにおける祭礼の変化についてお聞きした。

まず、本祭の山車に乗るノリコやオドリコが、地元の子供ではなく都市に住んでいる親戚の子供ばかりになったという。また、今まで祭に参加する氏子は男子が多かったが、近年は人手不足でノリコや曳き手に女子が加わるようになった。さらには少子化と教師不足により、お囃子から三味線が消えた。昔と比べると、神輿などの重い神具の運行が困難になったということが挙げられる。

祭礼においても日常業務においても、安全保障など保険金が多額に必要になり、昔とは時代が変わっていると感じるようになったという。政治権力と関わっていた昔とは異なり、現代は政教分離の考え方から行政と神社の運営を切り離す必要があり、神事の運用が昔と比べて微妙に難しくなったという。

6 補足 8月3日の事前調査

今回の研修に参加するにあたって、事前調査として平成26年8月3日に、波々伯部神社の本祭の調査と氏子の方々への聞き取りを行った。その内容も、記載しておく。

本祭当日8月3日12時頃、宮ノ前地区に住む波々伯部神社の氏子である向井家のお宅にお邪魔し、お話をうかがった。そこで「おひねり（笹守り）」とよばれる波々伯部神社特有のお守りを見せていただいた。布や紙で作られた笹型の小さな色付き札で、毎年氏子に授けられるそうだ。向井家は旧家であるため昔の「おひねり」を集めて束にしたようなものが伝わっており、祭りに参加する代表者が身につける習慣がある。向井家の方によると、正確な「おひねり」の数は不明だが100は超えているそうだ。また「おひねり」の束の中心にあるものはたわいもない物だと思うが何かは分からないということである。新しい家にはこのような束はなく、「おひねり」を祭りの後に玄関先に結んだりしているという。

祭礼の儀の間に、中老で山車の曳き手の向井佑介氏からお話を伺った。向井氏は幼いころはノリコとして山車に乗っていたという。現在京都在住であるにもかかわらず、毎年実家に戻って祭りに参加する理由は「一家に一人は例祭に参加する」という暗黙のルールがあるように感じるからだという。また、同窓会のような役割もあり、人によってはお祭りが好きだから参加しているとのことだ。

祭礼を見学後、宮の前の山車を保管する蔵にも案内していただき氏子の片木氏からもお

話を伺うことができた。片木氏は、山車には組み立てるための目印として「北かわ」「北方」「あと」「まへ北」「水引懸」などと方角が書かれているが、組み立て方は見て聞いて教わるものであるし、方角で書かれても組み立てる方向で変わってしまうので分からないと笑って述べていた。祭礼の準備は格式ばかり過ぎないようにして皆で楽しむことを心掛けているということだ。

おわりに

8月3日の祭礼と9月3日4日の聞き取り調査を通じて感じたことは、波々伯部神社とその祭礼は時代の流れのなかで変化しながらも氏子の協力によって今日まで維持されてきたということだ。波々伯部神社とその祭礼を支えてきたのは、血縁関係という繋がりを持ち、時には協力し時には対抗して神社に奉仕してきた波々伯部八カ村全体がもつ一体感ではないかと私は感じた。

【謝辞】

今回の調査にご協力いただいた、宮司である近松健一様、財様はじめ波々伯部神社の関係者の皆様、8月3日の本祭でお世話になった向井佑介様とご家族の方々、片木一太様に厚く御礼申し上げます。

【受贈資料】

「みんなで知ろう 波々伯部神社 伝統文化を大切に（4）」（平成四年福井記）
 「神饌について」「護符（神札・お守り、御符）について」
 「祭礼と時代の流れ」「波々伯部神社特有のお守り」（波々伯部神社）